伊勢物語闕疑抄

二

特別
イ4
3163
208(2)

貴
イ4
3163
208(2)

[illegible]

國歌抄卷第二

[illegible]

[illegible]

有常　名虎が子　二代の帝　淳和仁明文德の時

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

えて世俗にいふことのごとく
人のおくるものも世と裏へたるこゝろ
へうゝんゝはくゝしゝわてきれる事とおもひて
ゝふ人も世とまゝくゝ
時のゝなりゝものゝゝひゝつゝ
わくゝゝ貴賞に流れ物ゝれゝさんし
世上のゝこゝゝかけゝゝゝ事をゝと云有常の性と
はゝゝゝれ祈なり恩見物よりてゝれゝ
ゝとゝあゝゝゝゝ世ゝ川尺ゝゝゝゝゝゝゝ
人も世どゝのゝゝのゝ人ゝ貧ゝゝゝゝゝ留
てきれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
貪而無宿留無驕何如子曰可也ゝのゝゝゝ

ゝゝゝ世務なるその事ゝもゝゝゝゝ地
年ゝゝわひなるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
わゝゝわまゝなゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ

ゝゝゝれゝ夫婦の中ゝゝゝれゝゝ心常のゝゝ
同樂に流世ゝ常ゝゝゝゝゝゝ夫婦ハ方の一期と
ゝゝゝゝゝゝハ常ゝゝゝゝ離ゝゝ男真ゝゝゝ
ゝゝ事ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

加茂の社に詣でゝ時は社なるべしとあるものの中さたちく有常
の言葉のわれ
ゆるしを待くといと哀なりひろれとまづ
すれわさをかうつをうわれりひ俗くゆんしろあひ
くゝひされ友ならつもふかくいはいくく
かまれとなれ事をいくかなる事もえせくれ
をまとくくれくくう
友遊業平の事これりひ俗くくをれ朝んをし
れりひあまるくく業平の方もいるこ郎たう
書なくていらべうくと
あとれつくくわひ見てしくをかれい
ことやいひはいるもいはるうり

十七年空は空になりと十四年と云流れ唯
四年あひそひそれ拙うとそれ拙うとそれ拙うとそれの名
あといふ推量あまくくこ云心こ年こなれ
中も真実ものまくくこ云心こ年こなれ
四月ここ心中と業平ふ推量あまと
女と推こそれん籠の源氏くくき本　ひと
つくわひ見てこと心やいこれひとりやい
うくきり上旬に物沈に同一女の離郎の海
こもお船をれ
かの友ちこれと見くくひくくこ和とれりひくくこ
ものまて遠つくてあれ
彼友遊業平と有常が文と見くく和とれりひて

歌の道つたはりのまことかの物まねと云まねの字よ
てりのことを取りて見てくをりを
年たけ物も十とくをいひいつるなと
いくさとひ悪とをものをさなるん
び帝ハ女のうへと助て云り四十年のなりをられい
を間宮家をる物いふ幾度悪とをものをて
そのひ物くいるをかりんと別る心さををと云り
かくいひ取りをるをれハ
物をやこのわをの好衣むへをを
悪をみををくををくをつをれ
天の好衣ハをるのりのまをと云物くををへ別の
衣も有ををんの物をいひ給をる衣ハ天の好衣をるへ

人間の物物くハなををとつひ出して救んと割じて
ををの也葉平の歌をふをををれをを物をれをを
自問自答をををんをををみををハ衣を日本紀ハ
衣裳と書をををくをををれハ一説ハ天子の御
衣とををを

秋や雨家や雨ゝと打りゝまて
ある所なりこの所ゝそゝろ所
秋ゝのかなゝく人の熱燈時く御い秋の来りて神
とゝ思ふゝ家の主く神とゝなりとゝなへい唯と
ゝ感涙してゝゝゝゝ
辛ゝゝとゝゝゝゝゝ人の様のさもゝゝ見ゝ来
ゝゝれいゝゝ

ゝ世ゝゝゝゝゝ年ゝ
ゝゝゝゝゝ者ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
辛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

死のことをなげかせ給ひしかば
たまはりて死ぬるも見わたすかぎりの
の雪をもつらぬきて死ぬる人のあとを日
女のうしろ姿ばかりぞ見えける時
きんのうちくのうちさたかく人の物語りあん
ちやうは我ものとなれるべうずと思ひてぞ
もやいつも女のわざをなりとぞいとんなるふ
さうれいをわきまへとなりいそぎのんのう
つまくれも雪となりやうやうひかたんん
といひいろと　定家卿の物語りの消えわたるも死を
見る雪はまたまたしたがうもん
もり屋んなる女わりうわれとちうわりうり女

あるもむ人命をれい心うんとて菊の死のうろへ見れば
つまくれとこのうへ屋敷
物すきの女なりなる屋ん愚見物語りはんをう
てをなくうなる死ぬるくも恨むなる屋んうをて云
うしは流りは　思ひ　ぶりうぶりたりいよか
うん貴の人いなりさしを屋くの上遊神知て
云んしは色の女のんを一流より小町とあまた物じ
て恨くの女色は涙うまいそれといそん事た
とひたりは知るも　はかりつるの　はつ代とる
ふ事といりありて　慰より　習ふ　撰集の
ゝゝ人志と同じゝゝてあまたも集て
をまゝゝ人志ゝどめてそこれてこ

近うちより愚見抄よい女のもとへ通て男よ
も恐まとゝ云とゝろ江流よいかまで業平その女
の濱よりもとゝ女房よんゆゝるゝ人なりげさし
て業平のんとゝんとゝらく菊の紀よこゝ流てやゝ
ゝれ分井よ白ふい流ゝ雪の
枝ゝとゝふ方ゝも見て
菊のいゝゝゝ川ゝふ西ゝゝれ分井よ見ゆ元
大ゝふい枝よ雪のゝりゝ紀とゝゆゝゝ菊の蔵
とゝのんなゝゝゝ出とゝ又ゝふい白ふ多のゝゝよ
てゝゝ流ふ事なゝ宮ゝれゝゝふゝゝ
のんふ業平と好色とゝふい宮ゝゝ流ゝ多
なゝゝゝの雪のやゝなる紀ゝゝゝゝん

んのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝたゝゝたゝむ
なゝとゝゝも又者ゝゝ通ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝて見ゝゝゝゝ
よゝ分ゝゝ家
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ業平ふ男のんと動業平して流ゝゝ元歌中
ゝゝ流ゝゝゝゝ動ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれ分井よ白ふゝゝんのゝゝ菊ふ
ゝゝゝゝ人の神ゝゝゝゝゝゝゝゝ
好色のゝふ元ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝゝゝゝゝ人の神の者ゝゝゝゝゝ
菊のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

らんとするのまゝにて女とも 古今女訓 絶入候
人まの時い白ぬの袖をのこしてやまれ候
ひとりねたこと交ぜ〳〵多く女のかゝることもち
なりゝ多く人とあひしるもちゝ多く程なく
かまくらのれたゞ不なまゝ女の用ゝ共ゆゝ
りのかゝねたこいわる物ゝもひたゝもと女
漢殿の后の仕事ゝ業平い忠仁公家礼ゝさら深
殿の后い當代母后ゝそれゝまもりこゝろ
ゝ人ゝい漢文の后のゝ法ゝ女ゝ世ゝ離り
の字ゝ男のかゝりかゝぐゝよ歌ゝれゝ不ゝれい
女の用ゝ不断同ゝ家礼ゝ食ゝれゝ見ゆゝ
わゝ雲のゝそゝゝ人の歌ゝり

さすふ用ゝ月見ゆゝ
天雲のゝそゝゝ所い座ゝ物ゝれいゝそ
とゝぐけいゝん為女の用ゝ業平ゝ用ゝ見ゝ
ど業平い女ゝ為ゝ世ゝ人ゝ知ゝれゝ
ゝ業ゝ時いゝゝゝゝゝ
とゝゝれいゝゝゝ
わゝ雲のゝそゝゝて家ゝ
我ゝ山の風ゝやゝ
び天雲い雨ゝ云心ゝ我ゝ程ゝて通ゝ
なゝゝ山の風のゝび風ゝ程ゝ
雲の下ゝんやゝゝゝと云ゝ程ゝ
通ゝゝゝ古今十文業平弼臣紀有常

姫と住みて昼はすわるまでの間昼はさて
夕ざれば海つものうらに潮くたりて夕なぎ
雲のうへ人の心ぞ知らぬ

ひ　ひ　業平の君の海つものうらにて
と詠めるこの歌やうくいわまた有名なる姫の
事貞女の名と聞いてもそれは紙はいつれの女とも名
とあるいはて高野の歌ひてそれ物語ものいとるべき
とや愚意の予覚るも
とあり名所はまた和とこわ人となん云々

愚者の論

むかし男大和にある女とよりひとくわひりなる
ちく移りてく交ひへすれいゆわ名所

道に添ひたるかたくのうちのいと材
物さと折く女のりくよみちるとひ名
愚見みやひへ宦学く書て礼記よりやひへ
し物まるとあるを大和にを女素良の京に
わ女よや消ともなし交ひへすれい業平也
素良にあられいく又との京に海つもく交
ひへせんとなるべし三月つるもの紅葉は
ちはなるべし病葉書きつて無通じ
肖や紅葉は若葉のの文ことを云りは面白
君とあるを折まる枝いまれ
ひくこう秋の紅葉しわかれ
君うるとれりひくれまる枝の葉みくかく

紅葉も所ハ嵯峨のわさう有なるよりかく多付か
と云んなるを
とくやつもくれハ逢るハ京うしさ門祭くもん
りく来り多
逢事ととやくくしく行るんさ
いりのまにうしろ文の作さもん
嵯峨雪うしは去なるれらし
はあるのんハ上の奇よりかくくも秋の紅葉しか
ものれと男のしあ所奇ようくくもあ秋さ
ようれ来所ハくくかれ行多作くへさ程ハも
なり嵯峨雪うしは去こそなる所ものと女のみを
咲つるく男の心と競ひて梅く重へはのかりと

あるくやうそうしたるハ
ものや林りハなるかくこ
男女ようかしらくれりひかりしてそん
なるるるうさ所とるの事う有多んハさうう多
らそふつけく世中とうしとれりひくハくハ
もくれりひくうく多奇となんてりのう
云つけく多
かりさくれりハかくて結れりひあひたる中心
ホしよ憂と所事とハうんあるハさかなる事う
ハくくおのうう部と出んとする女の德ハさ
性なる
出くハるんうるとハひやせん

世のさまを人はいとはねど
夫婦の間の恨みなく憎しと雖さ事のわるとは
世の人いとはるく我んうらみ
以ての外の御のまし
うらやましやいとん菊尾心
とうとうとなく出るいつよりひ女くなとさそう
とうとうんとなくへさ事をたはくわとなるもう
てうかう弱んといとはさてうるまりしめ
ゆんとかとよ出くとうるみられとりことを
もうとをたはくさるもはつるとのくを
云うう抱恠のけの字こわやしさみてと
云んと恠異と云まはくくなるとと云ばわ

急せうなるまるくうる男のんを中より行事ゆんを
うへさ事なりけんさ女部別ゆくはわし
とたりの祖ゆ一恠と云ふるくくしへりこと
見れと法さるくくしへりこと見かる見
弱ゆくへさ事もわるとたりの祖ゆはつるのくを
と見うう見と身と云字のんゆ見くもりと法を
たりうひなる世なりるる年月と
わるさ契つるく我や住ひ
か福ゆ出くいなんと成たりひのかの事を真ゆれ
ゆうひなるさ世なるるとはつるさ契つるそ我や
ま後りと我やるくるく真実ゆ契つるゆ人
たりうひなるさと云一説有世法ゆは福ゆ見くは

人の上よりとさすがにいとゞ唯分よりはて
ゆくへも知ぬよとあやまりてやうやう行く年
月とちぎりかはしてもりて不足なる事もあ
りけんと云う業平のみこ女を恨もとして我
とうんとをこれ真実毎夜ゆきあふ事
とひてなりあり
人いきかりひやもうんもむつ
かりけりまいてはこ行
見よおもしろのもかなりひやもうんハ山くいとゝ
多女のかりひやもうんかりひやせさるしてこんん
なりと出くいかゝ女の歌とかりひやすうんかも
もすやうもうんかいもこれいかりけりあ

いとゝ見しるとこもりてハ女のかゝる抱られハ方素よ
もむつ消とかはゆくゝくゝゝうみやうんか
西野のうく歌もみやうんうんゝ忘うれもとみや
うんうやうんかりうんの白家のむとさかけ多秋うれの
新家隆のうあ山まゝとそ定家の雅せて行う事
あり
ひ女ゝ久ゝくあうくゝ移んゝワひくうやわうん
りひとこせうり
男のかんまていひやもうんかりんもさのみゝ
かゝふかうひく浦梅して見ゝて留る前
なうと愚見共会ゝ俺くかりひ俺くなわと
有上の河よ郭なれ事よ家出せゝも堪思性

のなれよりもくさとみ男の方へ示めすとて
遠子もれたるーんなり
いまはくさ忘れ草の移りそる
人のんーまもせもう邪
かれーー家と出くあるふ所もいくくくらと
くいこれるー葉草の心よ無みまこそ生えたせりて
忘れ草の移りもうせもう邪とも
みて
つとれ草ふとそふさく拾なくハ
れりひろはもりりみ
よの歌ともくかさもてしめりなりひのわろへ
よくそ忘れ草よというゆまこそ植うなくを
歌なりかもやいふ事なれもうへしとうりみそなる
みもちの所なくいとなくとこれねくとこれるべくと
女のんみーくいと所と葉草の長よりる面白や
みくあるくるもふひかてなくこ
つとあんとれりふれくさかひり
きくくるもりのそりみくさ
とみかくくくみや歌を捨くいるんとんのん
のくかくくさふ有くくるけよ拾そうは
きくくありけんくるれてとこんと勝の字こ
みて
草ナカリ
草ナカリこよ之力所草れおとも
男のけりあくくもなりみ

世の我人とらりんじくくもち所所なり我人うそく
してさしもなき事ふかくいあーげたるは
見まくもなくてみ憎(カン)ミ世ものもせぐ三海つまくる
世こそのの根(ネ)もなく世(ヨ)の中(ナカ)のそうよたぐこそふびくなりと
いり
たいひとれとこの世くよ世ばよとれからくば
このぐ世く離(ハナ)れ別(ワカ)れしてこのぐ世よ世ばとこうとくば
くれいり世の楽りもなくば世をいふなり　私曰(ワタクシニイハク)
き木の実(マキ)　水宮(ミナサダメ)のおくそうりのくちして
恨(ウラミ)いべき事とをみくるあよ思(シ)びくうへは
決まなくみくるかけくつてしひとりのよりひ
あまおの所所いとんくさなくすとこくのく我
なる所所とくくとこさこのくるへこかくとくめく
ふくさ世くくるれくら海けくをくよくひかく
まぬくくあくとびまくひんをとくあくあ
くあげかくまくくくくくとくくくくく

のはんにん和なるを家りれとわるこれ男となを
いふ男つひさひかくとかさくるをてわ家
んはそのいうちひそそぬう無れとなるる
こはまこ長れるくこにえ祈んーえとく
やーさ事もたかるを佛も中りんこるに
と見法ひつへーあとそうを色も遊女の情無
性のなるさあく程れるくみわまみもなそたはひ
永なるんもやうくわひ添くとわんれりも
からんさはとそも見ちとくしたん中そ喫
かくく和なるも我もんもうあるくんれ
しやいとわはは法の初中後ふ仏かひうり
又日取ふ女房あるこの抱ふりふんうとやてを

和ふかるくんるを作なやわまはは抱法の事なるそもある
無さうひうるかを法不なし
ひるもれくてたるふあり程や忘さうとん女の
りくるを
うきあるくんを法えるもひとれねい
かりうる見法く程をるひーき
一度別ふく後ようきものかれりひるくるれた
程えを長れさまいるれ恨つ程を高うさと云り
かれはうくーわるとかく心奏みかれ趣く
初もゆくるわ扱いあるも月んと
と云りるれいされるをいひく男

葉草のこなたかなたよりわるとて月くの波こ
わひんくいんひとりとかくしさの
水のなれくたくとそあり
んひとりとかくしこ面こいみそへもあるとこ心とう
となるを水いろんくるくるくる

つもりわくまーさし潔切といふんなり

逸一

秋の秋の子秋と一秋よりなりしも

と業ありもくもや時なんん

ハ明し千秋と一秋よりなりとも云れ業ありて名ありなへーとと

ハ明へちもも和よりなんかひろ

ひーー田舎ひーひーろくのみとも井のりとう

出くわそひろとおらかよ敬よられい男も女と

ちちかーて有名れとおくこハ比女ととそえら

とおりの女比おとと世りひけーおやのわかれ

ときこさそなんろろさそひとれりのおとこのも

やそろもかくなん

田舎ひーひ常母の中よ底ぞーく呼し田舎

なる下子と云但馬潰波ぞの任よ有常ゲ下向

ろろるすとろへー

ひーー井はの井ひーよかけしーー半ろうを

ろーよろーーかいもろさろ中に

比奇惟清朴よ遺遍院殿川漾尺文字漢く

ろもよて表と付ーを上とと有中ひ流よハ鮮井

ひーろ石ろーとそひまね井と古流さ海くわれた

惟井筒ひひーー井ひーと云ハ童親ひひ井ひ

の川使の字ひ宝家ひひ井はの井ひーの立ろひ和

ねまにそやくもろあーー名その宝うか左京門内行ひ井ひの

井たゝの上より水をくみもとめ清しき盥(サミタレ)毎の法
愚見抄(グケンセウ)より前の詞(コバ)より井戸のもと(モト)よりわそふとあれ
ど男のこゝろにてとゝのゝ如く井ゝのうるさう
すきさうとゝもありまゝ給いとの世まで童(ワラハ)ものの
名家より何丸(ナニマル)ゝ申ひ文字と頼(モチヒ)たり妹(イモ)いたく世
のうとゝ男女たりひまりひかりてうたれ
ど我抱のやうに服(ハラ)しくいもたうまてとうり
女逸

くゝ申ゝ申ゝ申ゝもかうるね
恵なゝすゝくゝれゝあゝくゝ
髪(カミ)とゝあゝ男女ハを年来ゝいかんぞ申すと
男の元服(ゲンブク)の事ゝゝゝ

女おやの命の幸するゑ親のなさうみく
よなろう流れよいかひなくてたりひよいのひ
なさ祈めくわんろももろもろさかよ
ゆんとき大和國わ〜かよんとそそ門方々あ行の
雖波の浦ハすきこさなもあ月人と零歌
の歌うかの花ゆくとんあくハわこさ流ようる
有常而と業平の情熱のんなるべーわとえ
ろろこさもなく嫉妬するんなさいとこう
ろさこてきハ力とたくわふ祈と女ハ力とよ
ちたくろもまのろこ
風ハ沖波こ波こ流さ山
来まうや来ひとこゆんん

古今に弁の親王と申たると秋の比
雨とくさなくたく折ありあげさくに弁とくく題
注密動る注する赤三笠山といとくく鼻白波
と云沖波ちくろことい三んろ風吹こと歌こ
ろ海の真波白波三笠山川の越たく妹がわろ
んとろ三家に今業平真可山行ひ文字
数潟のやまうんわ秋の新こと云りに云
ひもへどてわふこそいこんろ上ハいひ
ちろりのなるこ白波ハ盗人のろ三笠山ひを
人をとこいり盗人とろこいふハ在みち
おこれも緑林白波と云りに歌ハ盗人の事と見
を御て綱よみくろ面白とこ宮家もさ拾ようろ

と感ぜられさう奇の心い風波はげしき時に三
田山と謂く艱難とも
いふべき我もとも見渡とも常り
我もといふべき事と家い我とも
と毛侍る風起我ハ
事と侍るいさ我いるい礼のせいなりとあり
同事とも奇清浦真儀抄云異くい奇のかと
いふと云り
さてさて沼なかるとなりひとく
かくもいとなりまれるたやをよ
こそかまはもめこそんかくもけくつとられとい
物とけてよつくいのあるひとくけこのうと
もれよりもとかるとんくうるというと故よるう
さうとれいかの女やまとの方とるやつとく
初そんくもけくつとられ愛しけくこと
しなるよけくいひひとくけるけれ
きとくうとかくひとと云と一流あ
ともそまはれ優なくと唯をまくとるる
見ば拍沙の湘潭の祈こさそこけんとる侍
見へけこのうそのの嵩子と半り
見うあるとるけくとるる伊弱山
宝れくくそ面は山
ふはの伊弱ハ高山と大和河内の傷の山と結国
歌りけこのやたの岸と富つもて雲井よ

足ゆゑ生駒山の
とりひとつ足ひとつをかくしてやまと人あんとゝ
つまゝ絵こひてまゐりたひくすさぬまは
やまと人業平こ
恋ゐんといひ和ことよるをぬまハ
たのまぬものゝこひしきそわる
古今無双ゝふるとゝ是ハ有のまゝの奇こ
恋ゐんと殺こるゝ物またのまといるあゝ
みすゝかるゝ恋しきわるこ
とゝひられとれとこを殺をぬゝりゝ
此恋を純の有常ゞ女の事といふハ貞女の和とあ
らそさんゝ

ひゝれとこゝかゝ中よすゝゝりれとこ実しゝ
しゝかゝ分れゝてゆゝられゝりまゝよゝこせこさ
つゝられゝまゝ俗ゝりゝ俗ゝりゝ行んゝゝりひゝ
ゝ人よゝこゝひわゝんとゝゝをたりゝ俗ゝこのれと
こゝゝゝりゝ
ゝゝ田舎よすゝゝり業平こ実しゝ人しゝかゝ京
俗上俗こ三年こゝゝるゝゝられハ今者三ゝ其生漫
外蕃育ゝ女年謂称ゝ者男女同こ三年ゝて
婚と改ゝゝとゆゝりれ和の事ゝやゝれもこ
よゝ俗こひ男ゝゝつゝゝり業平なり
ひゝわゝ和ゝとれゝゝられとわけて奇とゝんゝ
てゝ出ゝゝりゝ

門たてたくこ
ゆくこの年のことせとゆきちりひく
たくこしひこう新抗とれ
業平と昭てかくとてゆくなくこちなこ真実新抗と
可見こ定家卿なこよこ三年の後の新抗ちむ中
の時日なりこも
と云出そりなれて
わびさうゆきうゆきひさゆく年とつく
つせこかこうゆつこ
狐流一号と三かこくこ三流のうこ
三月云刈三年こと云り當流不開たく意の趣
うとゆ武れを抽と俳うゆきひさゆこ不と
そちなれとちりさしゆきうゆ年とつくこと云
き長よんひこく年とへらる祇よ世ぐちちひと
こゆつくせこそこうゆつくゆ歌こ友善と
事なる我それこともこ世ア之ゆ不勿論ゆ
きこもひこの契物とこゆつくめこれとこ
とひくいたんこちれこ女
特うひ宣ゆこひこもむこちと
ん不者こちこゆつりのと
業平のん氏女のかくゆうんひこゆんん知と
我い著こりそれへるこちこういひ宣い中京
月の夏へこゆ抽これい須のえんこちゆこ引源古
今業十二京の帝ゆこゆみちのゆこう

梓弓ひかいもく未敷方よりそなされ恋の
ち迷い
といひかれと男ゆつとりかの女いかかかくく
つとり　たちくれひゆけのとえれひ流くく志水の
われわれ　ちくくなりかの岩くれひの
ちして幸流もく
おくひいかの移こりかの言くくふくの世なりかり
清水のきれの細なく　波間流の氣くこ之さと
わひれなくて時とかくくの
敷方いとそそえそそわ
とかくそそこよいくくわ
寝みくく真実死なく
そで切なくんなくく　袖つとれくの流よ袖くと
ひくく男わつとくりわくく　れくくくくと女のさと
かなくくかくくふいひかり
わくくれわかくれひくくれかなりかくさくくれ
つとくの葉年と眼をくんかくくさくれ
たくくやく典とくくさくれ
秋の野くくくくの袖くくく
わくくくかくくくく

[illegible]
かまとなりくわりのわりたゆゝ
[illegible]
[illegible]男のみ[illegible]て云[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ひとゝ[illegible]
やかまとわりゆゝ[illegible]行[illegible]
ひゝ男のみ[illegible]
[illegible]ひ[illegible]人の[illegible]事
[illegible]二葉の[illegible]俺[illegible]人漢
殿の[illegible]業平のわりゝ[illegible]
[illegible]と[illegible]
のあ[illegible]流[illegible]
せ[illegible]人[illegible]面白し

[illegible]と神[illegible]湊の[illegible]
[illegible]
二葉の[illegible]業平[illegible]と漢[illegible]の[illegible]
[illegible]人[illegible]事[illegible]と推[illegible]情[illegible]心
[illegible]
[illegible]と[illegible]
事[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
ひゝ男女[illegible]
[illegible]女[illegible]
[illegible]

はくさと貫簀と云りりくいに松りに関たつと
水と前にかけ〳〵しく行と見をの橋にあるて
さそひの上り打れたるふこそれと所やつとさそる
絶まりけのもつゆる
我さそり抱れしかへいみもあること
れりへい水のしみもあること
女の我新と見てりのれりふいに唯ひとりとれりより
水のしみもあるとしなるこ
とこむとかのこさそなる男たちこて
みふさそ我やもしゆんかさ内さん
水のしみくりあるこ
水口の蛙がひとり内啼初夏とくこなるこ鳴
やもあいに蛙が啼休こ水口の蛙が啼ごく我れりひ
がそれこあるよりに内くそなるこれりひるを
なるを我れりひるそれこのもめるなるこ
ひと冬のこなるこ女生くいるれて
なくてくあるこかこ見るよりん
水りしたりこむをひるもの
あるこいに朝こそれをかごるをくるる何て
朝事のかくいに家にんさしも水りさるこ
そ決るがごるいまて水の泡あさくく
よなれるこ
ひと玄関の女のいに方のい我の笑よりあるけ
らまてりるる

玄宗の母竇の女なり二条の后の御事なり
勅撰云貞観十二年十二月貞明親王為皇太子
于時高子の女御依玄宗母竇号之 去年十
二月廿六日誕生高子廿七歳の賀別当三川尺記
業平の賀雪の賀なく時平とうてい同事なり
賀は宮十ゐみ門ゐ時ゐとうくすることいまの時
も十年くらゐ門へさの祝と命ずまいに十ち
ゐて孝命下御海ゐ山海の珍味と
集く酒宴わたしめ給へ御餐
しわ門ゐと涙なりなを行なをとこ業平は忠
仁公藤原の后ゐくへ家祝なとのれよ賀のな
行ともせられをゐくえ御説ゐを行ずるえんてハ

いくなるも唯とのゐ序よりゐくまてゐと
祝よわるねかけきハいゐもせかも
ゐのこゐひよ似ゐ時ハなし
上西院賀の祝とゐるを感西院祝と歌
いハ二条の后の御事なるゐ折ゐもまられね
なりいわる和と云りし御賀なられと云事ゐもも
し藤原の后宮十の御賀なるへさう藤原賀とも
くへさ和と御説ゐのなけきそいなし嘆嘆也
感動かんせいの事と云
ひ男とゐかなるゐ安のとゐ
ゐふ事いものをくるをたるとて
作ゐさんのなくゐ見ゆ

むつ結ぶ汁とわふ事は昔よりよ
て侍ることなんいなりと云り　わふ事は昔のおくろ
ひと名のたい吉野の川のゝ紀伊せのことを
ひと家のうち毋くわることてきちのたかひのまへとの
きりをふしなふのわさふり思ひんしやくさ業よ
なんさかんんといふたとこ
家の門禁中と房の業とをつちりろい業平と行ひ
わさすこてもむこしやうやまとのなんさろんん
さうい不祥と業平とそ思くとさうを妙た秋
風の吹く志ひ引ゝ吹わん拙とそ云んなり四流
くやまの業のなりんさろんん訳うてわりへも
いまこんわうと

侍ることもれさんとうけへいつとれ業よ
とのうへ毋をそわふいふたる
人とうけへい呪咀しのろふんなるもとくもな紀我
とのろくかへつくそのの方の上ことのへさ
と云こ法紀[illegible]普ふ呪咀清毒業不歌害方
者念彼観音力還着於本人と有ひんへ毋く
ことも わうれと人とけ難ひ難ひ難ひ

いかゝへの高門のそまれたりあ
ひ〜とゝとりなもとうもれ
奇の人民明なる古こいひ昔こいふ同事こと所
ゆゑ人まんに宜しきもと是いかゝへの高門のそ高
きこいひくもひ〜とゝとこうりあ〜たさとこふ
祖父母ゝそ〜ふうれいうる〜かゝと いかゝへ
の高門のそまれやしきさもそれもさりいたし
りのなる愚見抜よ高門のそぎまれと云けと安
乃夢とうゝてまれそうるゝへそゝいふと高門のそ
まれゝゝこいふていやしきさ法〜ゝくゝもひ
夢となぐうゝてそくうまゝるりのなれいうりあし
ゝもこりゝ高門のそまれゝゝいやしきさゝるこ

よゝ高事もゝゝ奇ひ高門ひ畑ひ高安ふこ
てやまいひ〜とゝとなきゝやゝ云り
とゝうゝれゝもなふゝもれりいゝやゝゝん
女行たれりいもや有ゝんみれりひてやゝゝんのゝ
芝化者の批判の初なるへ
ひ〜男法の函ひゝこの部よかゝひ高女ひたひ
こゝくゝ又ゝゝ高ゝれりゝ高ゝこなれいれこ
芦屋の里業平の和行もゝう細く通なり京ち
業平のかゝふなるへ〜ひたひ上法ゝ下向ゝ
まこゝゝきゝれりゝ高ゝれりゝと業平の女とゝなこ
高なり移加兎系部
ゝへりみゝゝ高ふいやまふ

春りんとたりひまとう郎
わしへのしかいさしてそれとも見れとや
まみ数ケ月ゆ掛なる数んもうへしかてね
もて毋濃くたりかなるされいれも春
名しと女とかくさあくくとなるへし
わしへとりみちるかしかのいやまおなる春
春れとりたりとりてとうてり
西
こりとはたりたんにいくうた
春さはたかのさして春へさ
ちりえと云はなるまし毋つと来うけるこの
れちる春ようつれなとしてそとも見てくも
源さはたりへの春のてくかとさた郎また
こりとえい出られありのるれいはんい郎かくしさ
毋はかは毋は掉のさして郎へさとりさるとて
春わくくしてさりあ郎ふさんと見てやと春
の中人の見てあくいやわや
はかりて春はてこの中人毋くいは細なくこと
さりとなる
さりれてこはまとなるるへのてこ
はえこいとのいむさもれく
んひとりなけくこるる郎
調云とんはとくはかりへしいとんと
はまはえていとれはいむのこみそ

さいくやうなるこゝろ所にはよんひとりけなげくと
なるこんひとりけ〳〵ゆんとはへし三界唯心外
無別法心佛及衆生のこゝのこゝろや
はるかにていこゝなるへし
はしきまたこゝろ人〳〵行とこゝてやるこゝもるひく
ねこゝろあるこゝとはるこゝもこゝはきなくこゝこゝ
行と面目なこゝこゝ
もしこゝんもゝてたえてるこゝのこゝ
ものこゝゝゝとこゝるこゝくしきこゝ
なこゝての後もゝこゝこゝそれこゝ
もゝとこゝ命こゝこゝの事こゝ云事なこゝこゝ。
家あくいたこゝむこゝこゝいこゝんるこゝゝこゝいこゝせ
こゝ所にはこゝ所にはこゝ所にはこゝ所にはこゝ合てこゝ
こゝあいひこゝこゝれせこゝもやこゝくこゝこゝのこゝこゝれて
ゝてたえこゝ所にはこゝこゝなこゝこゝこゝこゝこゝ後こゝこゝ
後こゝもゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝもゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこ

つまくもゆくへさうせつさ程うみまて生所こ
たゆまつこさしく云んとあ所こ
むつ和とこ多こみをたりるとも女うあ所ろりし
ゆめくやれりひろん
所と云流不関好多の女なれいあひてよしろ
めたくやうたんたりる
我かしてひとりくるあさうかの
り新きこれ記ちたわるとも
りかけきこねとい女のわぶなると云教なして人
よちこ所ふりりけきこもしてかこ所やうう月
有ともと云り 約りかの所目の多い話ふ所ともん人
のんといく新きん

ゆ
ちこうしてむとひしひりとひとりして
あひりりるきていとうこそれて
女の深法(センバウ)してもふなるとるれるこるとふよ及い
ちとうこうりりこうひよ契(チギ)りとむをひくあふき
ていひりるとていとくきしく云んみりる
むつ紀の有常かりこさを所よあるこうくとそ
くこさ所ようきて所りる所
業平有常りりく行々るう有常ようそ行て
とそくへふなり
知よりもれりひなくひぬ世の中の
人いこれをやこひとりりん

和とまうしけるとき日初てなくひとり世の
中の人いう程の事とやこひとはんとなも
みて
なくさめかねの人ことなるとも
こひとはいふとそいふ我しも
我もこひとは云事と世の人をおもと
思とは云そやとひ思れる我なるは我ゆへは業
平の意と云事とをもはめくさまたるとわるも
こひと云つさるは我しも業平のこひの所は
なりけれは不審なるとも常うとあるを宗
我流はこひと云事と向来流る我しも業
平と我はこひと云つるとわるも

ひとは西院の御門をみるわたくしまう
なりそのみとのみたくことをいと
そうとうり
西院の御門淳和天皇之愚見はこの門を
遺詔はしるくしく大原野に骨をたてまつる
て西院帝とは申なりとて育たくこと勅云宗子
内親王母橘の御子四位上清野女業和十六年
五月十又日薨
そのみこう物語ひくれはんとうの和こと文
のくなり歌人男はもてあるとくく女車と
わひのつくもとりて
てはつも

いと久しくきこえ給ふ
なかなかなる
うちなびきてやうやうあるべきなるべし
のいとうつくしき源の中将こそ
車と女車とをくらべ給ふ
かのいとほたるをとりてくる女の車よりまさりたる
車なりとて人びとおりたるものをとりやるべし
んとすれどもかの人びとの男のあるべ
うちなびきてやうやうあるべきなるべし
おりたるとそこの間ばかりと
びと車と女車とをくらべ給ふ
たりと女とをとりてくる
蛍はなれいはれたる袋なりとて入れて
ふるや車なりとて人びとをとりてくる
なりひかりまろ男のしろ
きを葉平」源氏蛍の巻
つの文をなんとくる源氏のうちとうを
きのこゝろをくみとのうちよりさしいだる
びとにおしらびとにおしつけとをくる
出くいるをかうなるべしこうなりけり
くあるとなくこゝろ
と蛍子内親王と
もそこの那つとめくまし
如相思

年へあるかくハ氏文ハ年へ絶つる事ハ世もわろく
つくもく世とさるを絶つふ世間を常いふ掛し
とみるへのなげくこゝろとこゝろとこゝろ
ちからを義し
かのいろはを
いはをわれなくそやゆるゆるうりうら
さゆる酒とも我いたゝすふ
前の業平の卒の中の中くいふまあくはてう
和しなくこゝろのやゆるかやゆるくこゝろ我い文
し真文の羅織とは又一切衆生い死とゝ事
を意の事をれいはする所い法界の又大とうり
て無つと死する所い又大人と又をなり色即恥

真淵のゝ心ハ也も常任不滅の儀し
わ免れるこの文このこの方をいふとそ
ちからをいふ
然ハさ悪くめ氏云ハ大きふ文をのゝ人とを
義し仮名紙を有々ろ直の字と見くこゝろのまゝ
まゝとも云説を定家の天福のかゝれの字
と云れをも見ハ可強いる順がてはげふ
みこのかいふ是一の和審をらい順うれうら
勿論なるも順ハ延長の所ふるもをてく天暦帝
のこゝろまゝ方ゝ朱雀院の御宇義平七天
慶九見をとをとをとをこゝろ後の順ハ事とし掛
し載る事如ハ若後人のくれ別が京畠とい

まんまく順がおほぢと云たるへし是はかり順
き孫とく八十歳書れおやちと云事不審
なるをみこの孫なるへし法華よ山なれども
是このこの寄ては祇そをろと云下へみこの
かいなしとはくをくそのはそいうれとともへ
きえかいあり八幡の寄の道理いとくひたく
なれども内親王の為まとよ無欲の心も
なさ祇よ少ゆる事とは変なるべし
ひとつさ男をうはあるね女とたりひろさう
あるすれおやあるまくたりひりそはくくさ山女と
かくへひやらんをさそをへまきたひ風をを
くうはあるねけをうはあるね猶思はあど
つまくもへきう源氏をはすてまあるさうら
すら親を女のたや我ひひさめね事あれいしを
先ようさう祇するくし男よ女のたりひはさて
きいくとふはくへ面とたりしなると宮よ
あまこは男の行西よ祇ようの源なりあるまし
すまくもいまきたひ面くねこ
人のなれいまくいきたひなくれいをしろ
いきたひなし女もやしくれいをまちくほし
きあひをよたりひはやまくちをよ海きれくよ
ふたやこの女をたひう男ちの源となりせをくも
ふくなしあくいそくはる男なくくあか
人のなれい業平とはしくさあひる

れひ風ゝとすることをてとゝうん先世さ河之
業平のゝと風ゝゝ以後こ世も やゝ[illegible]れいお
つゞきをしう ゝゝゝとかさく やゝ きゝ
さゝく 前尾不お 逐家 ゝ女の ゝ ゝさとゝ なり 朝
庭莫如爵つ黨莫如齒ゝんこをもゝ ゝ なゝい
ゝゝゝのまゝ れいゝ ゝとゝゝゝも 服ゝこゝの
行れやゝもゝゝゝゝ ゝもゝゝゝ拙ゝゝ女とれ
ひゝゝてゝゝゝゝ女とゝゝゝれひ ゝとこれひゝゝ
逆の字なり 儒玄史漢毋も 逆の字とひゝとよ
ゝゝ男ちの涙とゝなぜゝゝゝゝ ゝゝく 拙とれゝゝ涙
血ゝれ河ゝゝ大和物語ゝ 僧正遍昭ゝゝゝゝゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝ 叫ゝく 拙ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 義ゝ血の涙ゝゝゝゝゝゝゝ事
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きんちうなく人々なれば海とひく船たくさんなる
の人あひそりよをえへくみの日れいなの時そりよ
ゆんかうしていさせそりろむーの口人いさなす
々なのおりひとゆんーろいそのれされさそ
ゆんや

おやわしてよそりおのおやこれおりひくそわれ
ほうよ我人のあとともたりくそかれよいゆつま
実儀ーあまいば遠ーたなかくしも表実を
まやうふとしもへさと云流ぎんだらしても
死しかうして事前ーしてむーの口人業
平ことの義ゆ云ーゆ射ーて事
つま世ん人とれりゆも潔ねらーこ他者の色

清姫

むーせそかうかりそ有々りひとりいやーさ男
のまりーさひそもいわくなる男もそりいや
ーさ男もれ志いもとの清ことりふうへのさねを
わひてもいそりそりりんさーいーりれと
さ高のやーさつさもなーいさるれいうへりさねの
かさとそりを有りくりせんうさもあくてたゆさ
りなさそりうれとかめわくなる男やていや
ふりるーかりもれいやさーさりりさうの
うへの衣と見出くやりるくく
うへのさねを重なり数の上を義の字なれ
そりかう兄弟なりわくなる男業平なり

やうしさ男雅ともなし黄之袍とくいての
なりまくい又りまくうい中年ありていまよ
乃ひもくいみりまくじ
やうしさ事とをすりなるへ女のよりう男
の衣とわるへ毛ちいとのたごりうもとわるさそ
りんこ毛袍服濯之衣と云りりうさう緑
袍六位の袍なりと
むりりさの及ちさ時ちりりうり
殿なる草木そりれさりりと
山奇古今十七業平約臣の奇之朝出よ女のたと
うとを拾くりりりへ人の衣とりりそよ
乃こやりとりりりの奇のい蕎と女のたとへりり
鶏のりりさ時いをりりまもとわるれよりりりと
殿なりりよ木とりりり蕎のゆりりと乃重いりりりも
りりりり